

『解放』(大正期の総合雑誌)目次(一) : 大正八年  
六月創刊号より同一〇年三月号までの分

著者	本間 洋子
雑誌名	日本文學誌要
巻	1
ページ	44-61
発行年	1957-12-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00018939">http://hdl.handle.net/10114/00018939</a>

# 『解放』

(大正期の綜合雑誌)

## 目次 (一)

——大正八年六月創刊号より同一〇年三月号までの分——

## 本 間 洋 子

### 大正八年六月創刊号

大正八年六月一日發行

この雑誌は大正期の代表的な雑誌の一つで、大正八年四月創刊された『改造』とともに、大正期のデモクラシイと労働者運動との高揚のなから生れ、その一層の展開に貢献した。大正一二年九月一応終刊し、それが山崎今朝弥の手にうつって社会主義的な雑誌として断続しながら昭和初年まで続いた。正確にはいつ廃刊になったのかということをつくめて、この雑誌についてはまだ不明な部分も多く、立入った書誌的研究も行われていない。近く岩波書店の雑誌『文学』に、新しい研究者の手による調査が発表されるよしなので、読者はそれを参照されたい。ここでは目次の最初の部分を発表するが、なお次号以下にスペースがあれば引続き発表してゆきたい。本間君(日文科三年在学中)がつくっている目次は、いまのところ九分通り完成しているが、末期のころのが、まだなかなか見つからず、そのぶんが残されているのである。(小田切)

#### 解放宣言

#### 解放の社会政策

#### 解放の哲学

#### 軍国主義及資本主義管見

#### 人類解放の諸精神

#### 私学興隆論

#### 「現代社会主義の最も恐るべき弊害」

#### 婦人と社会(婦人欄)

#### 現実の社会と吾等青年(自由論壇)

#### 新日本創造の金科玉条(自由論壇)

#### 時事漫画

#### 時評

(一)

(二)

(三)

(四)

(五)

(六)

(七)

(八)

(九)

(一〇)

(一一)

(一二)

思想変化に対する首相の声明——国家公安と其の解釈法——危

險思想驅逐と保守思想撲滅——示威運動と屋外演説の自由——

万木一斉に緑を吹くの感——講和会議の進行と労働祭の罷工——

——軍備制限問題と国際労働會議——鮮人同化日支親善主従關係

——婦人の政談禁止撤廃運動

講和外交の批判(合評)

形式外交の失敗

ウイルソンの非人道

山東問題に対する外交精神

日支提携の要

斯くの如くんば山東は支那に引渡すべからず

海外時潮

□図書室

□英文欄邦訳

□ゴシップ

マルクスの真本と河上博士の原本

五月祭と八時間労働

貧富論

文芸

嘘の果(長篇創作)

永井荷風論

劇及劇場に就て

仏蘭西留学の頃

彼女の幻影(創作)

峯の雨(俳句)

海はよき哉(俳句)

ある晩(詩)

英文欄……

チャペンタイムス主筆  
シカゴ日日通信員  
倫敦モーニングポスト通信員  
ホワイトディング  
クレメント  
ブライアン

□表紙図案

□創作画

□カット

鍋井克之  
森田恒友  
南枝知一  
齊藤与量  
乙部孝  
関根正二

大正八年七月号(第二号) 大正八年七月一日発行

解放宣言

時評

国際連盟の改造

エホバとカイゼルとよりの解放(其一)

貨幣よりの解放

文芸の解放

武力と金力の禍い

□花盛りの日本——衆議院議員

□軍閥の外交の惨害——戴天仇君最近の書簡

労働者の叫び(自由論壇)

解放の先駆者

婦人と社会(婦人欄)

時事漫画

法科大学生の眼に映じたる上杉愼吉博士

萩原井泉水(九)

室生犀星(二四)

(一)

(二)

(三)

(四)

(五)

(六)

(七)

(八)

(九)

(一〇)

(一一)

(一二)

(一三)

労働運動の根拠（諸家合併）

□自治、自助を主とし、無用の干渉を絶念せよ

法学博士

福田 徳三（一六）

□何故の労働運動か

山川 菊栄（一七）

□労働問題の核心

北沢新次郎（一七）

□労働者をどう導くか

賀川 豊彦（一七）

□社会的開国運動を起せ

白柳 秀湖（一八）

□労働者の教育

安部 磯雄（一八）

□維新革命の教訓

堺 利彦（一八）

海外時潮

（一八）

田舎政治家の芝居見物

法学博士

恵 寿 限（一六）

日光の自然美と人工美

野口米二郎（二四）

史的人物の批判

文学博士

三浦 周行（二六）

島崎藤村論

加藤 朝鳥（二六）

観想（詩）

日夏耿之介（二二）

夏目雜詠（歌）

与謝野晶子（二六）

唄聞く日（句）

萩原 蘿月（二七）

テツルタツル

（一九）

創作

お光（長編）

広津 和郎（二）

孟沂の話

佐藤 春夫（四）

ある老人

谷崎 精二（四）

□表紙図案

鍋井 克之

□創作画

小川 芋銭

□カット

南枝 知一

牧野 虎雄

大正八年八月特別号（第三号） 大正八年八月一日発行

解放宣言

（一）

労働者運動の指導倫理

法学博士 佐野 学（二）

経済生活の解放（長篇論文）

法学博士 森本 厚吉（二〇）

露国革命の先駆者としての猶太人

法学博士 岡上 守道（三）

教育上のデモクラシイ

早大教授 杉森孝次郎（四九）

労働者崇拜論

賀川 豊彦（五）

自由論壇

脅さるる教育者生活

与謝野晶子（六）

軍国主義の虚偽

新明 正道（七）

婦人欄

山川 菊栄（六）

時評

（八）

海外時潮

（九）

時事漫画

小川 千甕（二〇）

ハンモック

（二一）

日支国民親善確立の曙光

法学博士 吉野 作造（二二）

第一特別記事

世界思潮の動乱と其帰結

世界思潮の帰趨

文学博士 桑本 嚴翼（二三）

思想より解放せよ

文学博士 三宅 雪嶺（二四）

精神的に観たる世界思潮の方向

富永 徳磨（二七）

猜疑的態度より信賴的態度に

法学博士 吉野 作造（三〇）

世界労働運動の方向

法学博士 麻生 久（三一）

世界思潮の方向

山川 菊栄（二四）

第二特別記事

世界の山水郷

南欧とところどころ

露西亜水郷印象記

西班牙の画的風光

瑞西アルプス

仏蘭西の夏

米国の山水郷

印度回想記

朝鮮金剛山

南独逸湖辺の村

遊仏日記より

イギリスの旅と風景

古都の風物

夏の都会と田園

江戸の夏

大阪の夏の宵

七夕

豊後の盆踊

長命寺の夏の日

有島生馬論

史的人物の批判

冷めゆく窯

テツルタツル

創作

文学博士

浜田 青陵 (一四)

大泉 黒石 (一七)

森田 恒友 (一五)

丸田 晚霞 (一六)

足立源一郎 (一六)

野口米次郎 (一七)

カズンス (一七)

菊池 幽芳 (一七)

生田 葵 (一八)

与謝野晶子 (一八)

理学博士

武田 久吉 (一九)

文学博士

松本文三郎 (一九)

笹川 臨風

上 司 小剣

沼波 瓊音 (二三)

北原 章子 (三五)

近松 秋江 (三八)

増田 篤夫 (三四)

文学博士

三浦 周行 (三六)

(高田蝶衣) (三三)

(三四)

展 望 (長詩篇)

ある女の犯罪 (長篇)

霞 の 音

労働者の子

田園生活者の告白 (長篇)

□創作画カット

齊藤 与里 牧野 虎雄  
南枝 知一

大正八年九月号 (第四号) 大正八年九月一日発行

卷 頭 言

人類解放に対する国際労働会議の文化的使命

東大助教授

森戸 辰男 (三)

経済生活の解放

法学博士

森本 厚吉 (一四)

二種のユウトピヤ

慶大教授

小泉 信三 (一七)

店員の解放

同志社講師

山口正太郎 (四)

何人の為めの改造なりや

生田 長江 (四)

露西亜閑話

大泉 黒石 (五)

自由論壇 (二篇)

(六)

婦人と社会 (婦人欄)

山川 菊栄 (四)

時 評

(七)

時事漫画

小川 治平 (八)

国際労働会議の日本

会議の正体と日本の支配階級の態度

室伏 高信 (八)

我国の態度及び提案

早大教授

北沢新次郎 (九)

国際労働会議と我国の態度

山田 わか (九)

西洋人に任せろ

代表者の人選と提案

巴里労働会議顧案

海外時潮

地中海観戦記

法学博士

高島 素之 (一〇〇)

法学博士

吉野 作造 (一〇三)

友愛会会長

鈴木 文治 (一〇九)

(一一三)

法学博士

牧野 英一 (一一四)

荒井 陸男 (一二二)

堀口 大学 (一二七)

井田 絃声 (一三三)

根室の情趣

変態心理日記

□近 作

□テツルタツル

日本の曙 (詩)

苦の世界 (長篇)

鴨 の 子

彼らと逢う

□創作画

□カット

石井 柏亭

鍋井 克井

南枝 知一

最近労働運動の厳正批判

労働者は何を要求しつつあるか

我国労働運動の反省すべき点

労働運動者の類別

真実にそして寛容に

具体的に取極めよ

我国労働運動者に対しての希望

海外時潮

帝都大学新進教授月旦

穂積重遠博士

北沢新次郎論

可憐なる製糸工女

権力階級流行を支配す

具体的文化価値としての自由

黒人解放論

日本現時の労働運動を評す

自由論壇

婦人と社会 (婦人欄)

知識階級と労働者——歐洲諸国の婦人問題——米國婦人參

権問題

時 評

時代思潮と軍隊——講和使節の一行帰る——ダンヌイオ氏の来朝——友愛会の面目一新——伊太利皇室の美挙——國

文を害する無頼漢的言論——高等師範の現代科設置——森

村翁の死去

野村 隈畔 (一〇四)

早大教授

北沢新次郎 (一〇七)

山川 均 (一〇七)

(一〇八)

山川 菊栄 (一〇九)

(一一〇)

安部 磯雄 (一一〇)

戸田 海士 (一一四)

堺 利彦 (一二六)

賀州 豊嶺 (一二〇)

三宅 雪嶺 (一二四)

神戸 正雄 (一二七)

(一二〇)

帝大学生

山崎 一雄 (一二〇)

早大学生

渥美 鉄三 (一二三)

丸山 直光 (一二六)

山口 孤剣 (一二七)

巻 頭 言

民衆の世界改造

唯物史観説の改造

経済生活の解放

ルウデインよりバサロフへ

早大教授

木村 久一 (一二)

高島 素之 (一三)

法学博士

森本 厚吉 (一五)

小樽高商教授

大西猪之介 (一五)

□旅の歌より

□近 作

恋愛心理日記

ゴリキ―と死刑執行兵

有島武郎論

美術の秋

院展洋画概感

二科会所見

美術院の彫刻

院展の日本画

旅の窓より

秋季創作附録

お千代と其母

風 聞

脳病院の裏

ボオドレル散文詩集

春の心臓

寝顔を眺めつつ

大野 一家

鎖(脚本)

□漫 画

□創作画

□カット

齊藤 与里

石井 柏亭

南枝 知一

鍋井 克之

小出 楯重

尾上 柴舟(一五)

中塚一碧楼(一八)

中野岩三郎(二六)

大泉 黒石(二四)

増田 篤夫(二六)

黒田重太郎(二六)

足立源一郎(三三)

幸崎伊次郎(三五)

齊藤 与里(三九)

永井 荷風(三三)

宮地 嘉六(二)

葛西 善蔵(三)

中村 星湖(三)

谷崎潤一郎(三)

芥川竜之介(七)

沖野岩三郎(七)

正宗 白鳥(六)

中村 吉蔵(二)

卷 頭 言

日本労働問題の特質

日本の国民性と労働運動

日本国民は本来侵略的なりや

覚醒しつつある基督教と其の社会的使命

国際労働会議に対する政府の態度と友愛会

友愛会理事

麻生 久(望)

英国労働運動の趨勢と三解同盟

婦人と社会(婦人欄)

山崎 一雄(五)

時 評

山川 菊栄(七)

対露不干渉論——所謂筋肉労働者の醜態——友愛会と吉野

博士——労働者怠業問題

黎明会と友愛会と改造同盟

堺 利彦(八)

松浦要氏の資本論全誤訳

高島 素之(九)

官吏の増俸運動を如何に見る乎

租税をもつて俸給生活者を救う可し

早大教授

安部 磯雄(二六)

官吏組合を作れ

鈴木 文治(二九)

海外時潮

黒田 礼二(三)

バガボンドの北京見聞記

荒井 陸男(三四)

驅逐艦上の一役

宮崎安右エ門(四)

靈的共産主義者

宇野 浩二(五)

竜之介の天上

森田 鍋井 小出

□海外文壇挿話

□創作画

大正八年十一月号(第六号) 大正八年十一月一日発行

創作

隻六の駒

断片

アモンチリアドウの樽

子供嫌い

暗に燃える予言(長詩篇)

宮地 嘉六 (一三)

志賀 直哉 (一六)

佐藤 春夫 (二三)

上司 小剣 (三三)

副田 正夫 (四四)

大正八年十二月号(第七号) 大正八年十二月一日発行

二重の解放(巻頭辞)

世界的文化競争を背景として観た労働問題

最近の世界人運動

労働者のみの社会

地主と小作人との協調如何

我国農民解放の曙光

時評

普通選挙と労働問題

尚早の語を排す

人間としての権利と生産者としての権利

労働者参政の基礎

統一的見地に立て

海外思潮

大正八年の総勘定

日本小説家の「創作力」

総劇界は眼覚めた

今年の美術界を顧みて

社会主義研究から労働問題へ

マルクス全集邦訳所感

「マルクスの崇」からの解放

事実上に立証されたマルクス思想の真理

社会主義疑義闡明のために

日本に生まれた不幸

頭の話

新装の民国から

ある手紙

□本紙新年号予告

□創作画カット

女流作家

春を待つ人々

海の沙(有島武郎氏推薦)

かやの生立

指鬘外導

(八六)

慶大教授 三辺 金蔵 (九六)

内田 魯庵 (九六)

法学博士 吉野 作造 (二〇〇)

新妻伊邦子 (二〇三)

山田 わか (二〇〇)

宮崎 竜介 (二一九)

島田清次郎 (二二〇)

(七三・三六)

埴原久和子 大貫 鈴子

小野美智子 (二二)

富本 一枝 (三三)

岡本かの子 (四四)

伊藤 白蓮 (六六)

大正九年新年号(第二卷第一号) 大正九年一月一日発行

曙光の前(巻頭辞)

苦痛の哲学Ⅱ人間苦よりの解放Ⅱ

唯物論の唯物史観

マルクスの価値論と価格論

小作人の解放

社会主義と労働組合

——労働組合の社会主義化と社会主義化の組合化

与謝野晶子 (一一)

賀川 豊彦 (二二)

文学博士 桑本 厳翼 (四四)

慶大教授 小泉 信三 (六六)

法学博士 河田 嗣郎 (九二)



治安警察法存置論を駁す

慶大教授 室伏 高信 (二三)

前代悪習の矯革

文学博士 三辺 金蔵 (二三)

海外時潮

(二三)

白耳義殖民地の富力——米国に於ける支那人——暗黒の塊

匈国——亜細亜に対する欧人の幻影——パルプ製の絹靴下

——煙になる金額——世界の金産額

新時代の新人物月旦

森戸辰男論

黒田 礼二 (二四)

山川菊栄論

伊藤 野枝 (二五)

島田清次郎論

神明 正道 (二六)

鉄柵のもと

西川 百子 (二七)

漫画大正九年の予言

岡本 一平 (二八)

(1) 空気餅

(2) 職工の鼻息除

(3) 殻の家

(4) 高等官の

おわいや

(5) 髪結床の怠業

(6) 一人座

(7) 大銭払底

(8) 幼稚園大学

(9) 代用食病

(10) 労働講座

(11) 奸商取

り (12) 傑作「永遠に考える人」

海外社会小説 解放

井篁 節三 (二八)

紫の姿

伊藤 白蓮 (二九)

無我苑物語

伊藤 證信 (二九)

□創作 カット

牧野 虎雄

近藤浩一路

小川 千甕

南枝 知一

創作

ある男の話

島田清次郎 (二)

筋のない小説

宇野 浩二 (二六)

海岸で

長与 善郎 (二六)

針

広津 和郎 (二七)

不思議な人

谷崎潤一郎 (二八)

放浪者富蔵

宮地 嘉六 (二九)

結婚後

有島 生馬 (三〇)

大正九年二月号 (第二卷第二号) 大正九年二月一日発行

人間彫刻師の涙 (巻頭辞)

(二)

「労働の芸術化」か「芸術の労働化」か

長谷川如是閑 (三)

超越主義の精神

野村 限畔 (三)

経済心理より見たるマルキシズム

賀川 豊彦 (三九)

政治の理想と殖民地教育

大沢 章 (四〇)

国際労働会議の成績を評す

法学博士 堀江 帰一 (四一)

時評

(四一)

雑誌「文化」の生誕——四民平等論を排す

西伯利と軍閥外交——労働会議使節の帰朝

労働運動者のひとり言

麻生 久 (四二)

ある女の裁判

伊藤 野枝 (四三)

三民主義

戴 天 仇 (四四)

西伯利の印象

栗原 基 (四五)

伊豆の共產村を訪ねて

三田 隆吉 (四六)

海外社会小説 解放

井篁 節三 (四七)

□創作漫画評 (二月)

K Y 生

□創作 カット

森田 恒友 永瀬 義郎

南枝 知一

創作

結婚後

鎖を鳴らして(外四篇)

うば車

筋のない小説

有島 生馬(三)

白鳥 省吾(四)

小川 未明(四)

宇野 浩二(六)

二月創作界漫画評

創作

牟田口氏の憂鬱

一粒の粟

星飛ぶ夜

葬式の日に

のどほとけ生(四)

谷崎 精二(三)

中条百合子(六)

鈴木善次郎(三)

徳田 秋声(六)

大正九年三月号(第二卷第三号)大正九年三月一日発行

真理の勝利(巻頭辞)

社会主義(未来国家)を論ず

労働及娯楽の解放と生の歓び

現代人に共鳴するカーライル思想

小作人解放の前に

社会主義の将来

欧米諸国言論抑圧の歴史的批判

思想の自由と露西亞帝國政府の態度

アリエルは自由だ

旧独逸の思想政策

英米に於ける言論の自由

婦人労働運動(婦人欄)

時事批判

第四十二議會——真理の闡明——独逸大学の學術封鎖——

思想の転居

露国哀話黎明期の一悲劇

なめぐじと私

マルクスの肖像に

佐野 学(三)

大山 郁夫(四)

石田 憲次(三)

横田 英夫(五)

法学博士

吉野 作造(五)

黒田 礼二(五)

新居 格(八)

木村 久一(九)

大山 郁夫(九)

山川 菊栄(五)

新居 格(四)

古市 春彦(三)

賀川 豊彦(四)

西川 百子(四)

大正九年四月陽春倍大号

(第二卷第四号)

大正九年四月一日発行

合掌と黙禱(巻頭辞)

資本なき生産の世界

文化生活と両性問題

婦人解放と男性化の杞憂

新社会の結婚及家族

自由母権の方へ

性的本能と理知

改造期にある社会主義

社会主義より文化主義へ

社会主義の改造

集権より分権へ

フランス労働総同盟

時事批判

社会経済の病理

国際文化主義提唱一步

唯物主義より精神主義へ

慶大教授

高橋誠一郎(三)

山川 菊栄(三)

久布直勝(四)

伊藤 野枝(四)

大山 郁夫(五)

文学博士

桑本 厳翼(五)

室伏 高信(六)

早大教授

安部 磯雄(五)

植田好太郎(七)

賀川 豊彦(九)

大沢 章(五)

富永 徳磨(八)

労働組合権承認の要求へ  
政党政対民衆問題

荒畑 勝之 (二七)

重大意識ある解散と総選挙

法学博士 今井 嘉幸 (二七)

政党政対する民衆の不满

早大教授 木村 久一 (二四)

民衆の自覚と態度

法学博士 河田 嗣郎 (二四)

政党政と民衆

(二五)

森莊三郎博士——黒須竜太郎氏——有島生馬氏——巖谷

小波氏——沖野岩三郎氏——山川菊栄氏——寺尾享博士

——新居格氏——佐野利器博士——鈴木梅田郎氏——阿

部秀助教授——上司小剣氏——湯原元一氏——平沼淑郎

博士——井篋節三氏——内田魯庵氏——小川未明氏——

野村隈畔氏——遠藤無水氏——大島正徳教授——添崎一

博士——川合貞一教授——杉村楚人冠氏——富永徳磨氏

——北沢新次郎教授——賀川豊彦氏——松田源治氏——

神戸正雄博士——室伏高信氏——内池廉吉博士——頼母

木桂吉氏——上田貞次郎博士——白柳秀湖氏——高田保

馬氏——長谷川如是閑氏

素寒貧共和国

井篋 節三 (二五)

京都大学の人々

平田 江村 (二六)

歌集『無産者』を讀みて

文学博士

厨川 白村 (二六)

民衆大学の人々

飯塚友一郎 (二七)

十字街頭の托鉢

宮崎安右エ門 (二七)

クロボトキンの判決と露仏同盟

遠藤 無水 (二七)

創作漫画評

のどぼとけ生 (二六)

大和路の春

近松 秋江 (二八)

みどりの丸

春季附録

土地

玄宗と楊貴妃

墓参

懷胎

身上話

ある浪人

千人風呂

M候爵と写真師

伊藤 白蓮 (二六)

武者小路実篤 (二)

近藤 経一 (二七)

正宗 白鳥 (二六)

園池 公致 (二三)

久米 正雄 (二四)

高橋 勝也 (二五)

葛西 善蔵 (二六)

菊池 寛 (二四)

大正九年五月号(第二卷第五号)大正九月五月一日発行

光に躍る新緑(巻頭言)

思想問題と国家生活(巻頭論)

「社会思想」としてのアナルキズムと国家

国家の向上と自由思想

言論圧迫三百年

時事批判

カルル・マルクスの暴力思想観

解放の政治哲学を論ず

婦人労働者に関する一考察

崩壊しつつある家族制度

晩近の露独

新しき世界戦

露国革命との交渉

阿部 次郎 (二)

大島 正徳 (二三)

福田 徳三 (二五)

木村 久一 (二六)

佐野 学 (二七)

土田 杏村 (二八)

暉峻 義等 (二九)

河田 嗣郎 (二二)

大川 周明 (二九)

有川 治助 (二七)

過激化しつつある独逸  
芝浦製作所事件の教訓  
新旧道德悲喜劇

早大教授

木村 久一 (二二〇)  
麻生 久 (二四〇)

事実Ⅱ思想Ⅱ道德Ⅱ法律

白柳 秀湖 (二三〇)

私の旧思想が見た祖父

沖野岩三郎 (二二五)

移り変わる世の道德律

馬場 孤蝶 (二四二)

維持欲と発展欲の抗争

長谷川時雨 (二四四)

支那の共産主義村

沢村 幸夫 (二四六)

溪より溪へ

若山 牧水 (二五〇)

創作

愛猫抄

室生 犀生 (二二)

女と子

芥川竜之介 (二三〇)

父と子

広津 和郎 (二三三)

雑感

武者小路実篤 (二四)

## 大正九年六月一周年号 (第二卷第六号)

大正九年六月一日発行

生産者への世界 (巻頭言)

(一)

私有財産権の社会的基礎

法学博士

穂積 重遠 (二)

現代社会生活と知識階級

大山 郁夫 (二〇〇)

西伯利撤兵と過激派の前途

法学博士

千賀鶴太郎 (三)

国際連盟観念の発達

社会連帯思想と階級闘争説

私有財産制度の研究

西洋におけるブルジョアの私有の発達

高畠 素之 (五)

分産か共産か

新居 格 (六)

奴隷財産の話

荒川 進 (七)

私有財産主義の立場から

井窠 節三 (八)

労働運動圧迫の歴史

米国における労働運動と官憲の態度

早大教授

北沢新次郎 (四)

仏国における罷業迫史

植田好太郎 (二〇)

英国の労働団結禁止と其精神

荒畑 勝三 (二〇七)

電車罷業の真相

早大教授

安部 磯雄 (二六)

市電ストライキの責任

江口 渙 (二三)

一小説家の電車罷業観

早大教授

北沢新次郎 (二七)

従業員の奴隷的生活

一従業員 (二三)

誤魔化しの電気局

麻生 久 (二四)

革命及反革命

遠藤 無水 (二五)

脱獄囚哀話

古市 春彦 (二五)

東京にて (短歌)

西川 百子 (二〇)

掠奪心理

掠奪者は誰

沖野岩三郎 (二八)

パンの掠奪と女の掠奪

白柳 秀湖 (二九)

動物界に於ける掠奪

理学博士 石川千代松 (三〇)

生存競争と略奪

理学博士 草野 俊助 (三五)

総選挙戦の跡

政党及選挙人の心理

文学博士

三宅 雪嶺 (三〇)

総選挙観

犬養 毅 (三四)

創作

涙  
曙  
ひまな獵人  
未練  
正直者の手記  
借家人

大正九年七月号(第二卷第七号)大正九年七月一日発行

光を盗む(巻頭言)

国家的万能力の不合理性  
文化生活と知識の民衆化  
恐慌と経済組織の欠陥

女性と女権

ブルジョアの財産の発達

時事批判

労働組合法案批判

内務省案の価値

お役人の労働法案

治警第十七条撤廃より労働組合

労働組合法制無用

制定乎治警十七条撤廃乎

内務省及農商務省案

内務省案の長短

根本義を無視せる法案

娼婦制度の研究

島崎 藤村(三)  
藤本 和市(二三)  
細田 民樹(二六)  
谷崎 精一(二七)  
宮地 嘉六(二四)  
近松 秋江(二三)

長谷川如是閑(二)  
戸田 海市(二五)  
大内 兵衛(一九)

法学博士  
河田 嗣郎(二四)  
高畠 素之(四)  
大山 郁夫(四)

森戸 辰男(四)  
杉原 正夫(四)  
安部 磯雄(六)  
水沼 辰夫(六)  
北沢新次郎(七)  
横田 晃一(六)  
鈴木 文治(八)  
荒畑 勝三(七)

早大教授

早大教授

古代娼婦制度史考  
娼婦生活の新傾向  
売笑婦問題  
娼婦制度の破壊  
日立鉦山事件 人獄記  
漫画大都市雜観(TN子)  
代々木ガ原(短歌)

創作

島の話  
小泉講師の懺悔  
祖母

大正九年八月号(第二卷第八号)大正九年八月一日発行

黄金慾の歴史哲学的意義(巻頭言)

現代哲学と資本主義精神

労働運動に対する知識階級の地位

個人の完成と社会的経済生活

ブルジョアの財産の発達

知識階級と社会事実

時事批判

貴族制度論

貴族階級の本質と心理と運命

使命を果せし歴史的遺物

貴族制度の貴族院

華族制度の帰趨

貴族の勢力失墜

医学博士

佐野 学(一五)  
山室 軍平(二五)  
富士川 游(二二)  
賀川 豊彦(二六)  
麻生 久(二八)  
(二四)  
(二五)

正宗 白鳥(二)  
舟木 重雄(三)  
加能作治郎(三)

文学博士  
米田庄太郎(三)  
山川 均(一九)

慶大教授  
野村兼太郎(三)  
高畠 素之(四)  
権田保之助(四)  
大山 郁夫(六)

帝大助教授  
佐野 学(七)  
河田 嗣郎(七)  
川辺 真蔵(八)  
正親町季童(四)  
三宅 雪嶺(七)

法学博士

文学博士

世紀末の貴族制

総ての人を皆貴族に

民衆思想の勃興と貴族

革命婦人 ソヒヤの最期

河原葎(短歌)

京都大学の人々

日立鉱山事件 入獄記

佐渡の海府から

信濃奥山中の人と自然

九州の「日光」と英姫

創作

刑余の姿

幼年の思い出

海 二題

口挿画

万鉄 五郎 林 俊衛

大正九年九月特別号(第二卷第九号)

大正九年九月一日発行

左傾乎右傾乎(同人語)

マルキシズムとしてのボルシエヴィズム

法学博士

早大教授

ギルドマンの見たる新社会組織

階級社会の發生的考察

協調会の団結権

貴婦人生活の解剖

(一)  
福田 徳三(二三)  
北沢新次郎(二三)  
佐野 学(二三)  
森戸 辰男(二三)  
山川 菊栄(三三)  
大山 郁夫(三三)

享楽主義批判

享楽主義の倫理

現代人の所謂享楽主義

享乐的なる所謂文化生活論を排す

(欧米)労働運動の最近傾向

仏国労働運動の一転機

最近英国労働運動の傾向

米国に於ける労働争議

独逸労働運動の近状

職業心理の解剖

会社重役の心理

小学教師の二重生活

役者の料簡

私の知ったお医者様

宗教家の生活心理

代議士の精神の変革

警官と示威運動

試験済の議會政治

六十三人の編笠行列

創作

女 優

幼なき者

弱き男の話

出世を考える

彼の結婚

文学博士

田中 王堂(二六)  
野上 俊夫(二七)  
土田 吉村(二七)  
山川 均(二八)  
室伏 高信(二九)  
鈴木 文治(二九)  
田辺 忠男(二九)  
白柳 秀湖(二九)  
下中弥三郎(二九)  
岡 鬼太郎(二九)  
生方 敏郎(二九)  
沖野岩三郎(二九)  
馬場 孤蝶(二九)  
麻山 改介(二九)  
尾池 義雄(二九)  
麻生 久(二九)  
宇野 浩二(二九)  
島田清次郎(二九)  
近藤 経一(二九)  
鍋井 克一(二九)  
舟木 重信(二九)

大正九年十月増大号 (第二卷第十号)

大正九年十月一日発行

軍事型社会と産業型社会

マルキシズムとしてのボルシェヴィズム (其二)

法学博士

福田 徳三 (二)

群集運動についての一考察

法学博士

植田 好太郎 (一九)

都市社会政策実行の根本条件  
其日暮しの東京行

早大教授

戸田 海市 (三六)

労農露西亜内外観

労農露国の労働組合

サウエート・ロシヤの教育

ソヴィエット露西亜視察記

労農政府と其運命

労農露西亜の結婚制度

恋愛と結婚

原子文明両社会の結婚制度

進化せざる結婚制度

時事批判

論功行賞の皮肉、以太利に於ける赤化運動、米賓款待

コスモポリタンの心理

桜と仲と愛国心

コスモポリタンの恋

コスモポリタニズム点描

新旧道德往来

生物学上の愛国者と危険思想家

中山 啓 (二七四)

□鳴らぬ半鐘

(二九)

□万国欄

(二六)

創作

ある女の死

小川 未明 (二)

土方部屋

宮島 資夫 (一七)

暗い部屋にて

葛西 善藏 (五)

大正九年十一月拡大号 (第二卷第十一号)

大正九年十一月一日発行

自由戦争 (巻頭語)

マルキシズムとしてのボルシェヴィズム (其三)

法学博士

福田 徳三 (二)

自然主義文明批判

現代の神としての自由

ラッセルの労農露国観を駁す

亜米利加人心理の研究

米国人の正道人道

学窓より見た米国及米国人

建築を通してみた亜米利加人

文芸上の亜米利加

米国の富と宗教

現代商業制度の研究

商業及商人階級の発生

小売商征伐

文学博士

三宅 雪嶺 (六)

帝大助教授

高柳 賢二 (七)

早大教授

今和 次郎 (七)

慶大教授

野口米次郎 (八)

賀川 豊彦 (八)

荒川 進 (六)

早大教授

安部 磯雄 (二)

消費組合と公設市場との価値

高島 素之(二六)

陪審裁判と商事裁判

法学博士 竹田 省(二三)

時事批判

山県公の入京、万国日曜学校大会、排日問題と国家、主義

及人道主義

大山 郁夫(二三)

現代人氣質

成金御前

白柳 秀湖(二三)

腹黒の個人主義者

久津見蔵村(四六)

憂国家

新居 格(四九)

軍国主義のユウトピア

竹井 八十(五)

平民主義華族

巖谷 小波(五五)

文壇の理想家

宮地 嘉六(五九)

自由意志を叫ぶ人

沖野岩三郎(二六)

火事と半鐘との関係

堺 利彦(二七)

失業問題に面接して

松岡 駒吉(二六)

□万国欄

(二六)

創作

羽衣

長与 善郎(三)

陰影

室生 犀星(三九)

暗い部屋にて

葛西 善蔵(三九)

裏切られた人々

宮地 嘉六(五)

## 大正九年十二月歳末特別号(第二卷第十二号)

大正九年十二月一日発行

優勝者の頽廃(巻頭言)

(一)

大正九年大観

感激なき政界の一年

大山 郁夫(二)

回轉期にある政界——資産階級の政治家及政党——在野党

合同の虚声——政党の常習犯——外交に於ける國際主義——

——民衆の思想感情と政治——感激なき時代

波瀾重疊の經濟界

田辺 忠男(二)

大正八年末迄の総説——大正九年三月初旬迄——恐慌状態

及び其の以後——恐慌の予防と善後策——財界の将来如何

社会思想の進展

堺 利彦(三)

クロボトキンの学説紹介——普選運動の失敗——メーデー

祭——經濟恐慌の影響——木村氏事件の突発——社会主義

同盟の産声——友愛会大阪大会——社会運動雜俎——反動

団体

労働運動の一年史

荒畑 寒村(三)

普通選挙権の要求——労働運動の政治化——労働者団結力

の試練——組合同盟会の設立——製鉄所と市電従業員との労

働爭議——米国労働爭議との比較——市電従業員爭議の事

実——所謂五ヶ条——日本労働運動史の一新記録——芝浦

製作所の罷工事件——与えられたる教訓——失業問題の勃

発——富士瓦斯同盟罷工——罷業惨敗の批判——印刷界の

天労資戦——十月十五日——正進会の戦略——事実批判

講座哲学と講座哲学者

久津見蔵村(三)

日本に哲学ありや——哲学専門の諸学者——東西兩大学哲

学部の権威——カントとショーペンハワーの至言——受売

取次御売の諸哲学——畢意武陵桃源の独楽学問

宗教界の不尊嚴

沖野岩三郎(三)



仏教徒の選挙騒ぎ——東京府の社会課——世界日曜学校大会

時勢化の教育学術界

此処にも遂に秋風到る——最高学府の不祥事——教育者の

抬頭——改造のチョッカイ——大学雑誌——女子の方面——

——何等の進歩も見ざる教育会——ナサケなき学術会

文壇画壇の一年

九年文壇の中心的作家——似而非現実主義の非難——室生

広津加能の諸家——藤森豊島江口宮地の諸家——里見氏の

技巧と芥川氏の才華——如是閑氏作品——月評のみの批

評壇——画壇のマンネリズム

生存競争の哲学

一九二〇年の世界

疲労せる英吉利西

資本主義跳梁の米国

独立社会党と最近独逸

休養仏国の社会相

顧瞻以太利の一年

地球上に投ぜる露西亞の陰影

## 大正十年新年号 (第三卷第一号)

大正十年一月一日発行

希望は燃ゆ (巻頭言)

ロートベルトスの国家社会主義

闘争の心理

慶大教授 小泉 信三 (二)  
高商教授 大西猪之介 (一四)

女性の反逆

社会改造の文化的意義

露西亞農民階級争闘史

国家と社会運動

明治維新の新研究

明治維新成敗の跡

世界の商業主義から見た維新

攘夷派成功の維新

徳川政府の経済的自滅

維新前の民衆運動

明治維新の遠因

ブルジョアの維新

京阪文化の社会相

京都文化の特性

回想の大阪

浪速津に咲く花

風俗史上より見たる京都

魔性の都大阪

上方の人々

紀南半嶋夜話

疑獄心理の解剖

疑獄心理的検索

疑獄と制度の陥穽

伯林通信 蝙蝠日記

古事記神話の地理的研究

文学博士

山川 菊栄 (一四)

金子 筑水 (一五)

文学博士

佐野 学 (一六)

法学博士

神戸 正雄 (一七)

文学博士

三浦 周行 (一八)

白柳 秀湖 (一九)

法学博士

大庭 柯公 (二〇)

滝本 誠一 (二一)

文学博士

尾池 義雄 (二二)

文学博士

三宅 雪嶺 (二三)

堺 利彦 (二四)

文学博士

厨川 白村 (二五)

黒田重太郎 (二六)

上司 小剣 (二七)

江馬 務 (二八)

賀川 豊彦 (二九)

竹久 夢二 (三〇)

沖野岩三郎 (三一)

新居 格 (三二)

大山 郁夫 (三三)

黒田 礼二 (三四)

石川三四郎 (三五)

裸にしたる在米「ジャップ」

芭蕉の自然礼讃

英国労働運動三十年史

□千鳥足

□万国欄

□美女醜女

□獣の道徳

□春季雑詠

□解放抄

□挿画

創作

伊藤 弥太

南枝 知一(カット)

牧野 虎雄

小出 楢重

近藤 栄蔵(二五)

荻原井泉水(二六)

荒畑 勝三(二七)

(二七)

(二六)

(二五)

(二四)

(二三)

(二二)

武者小路実篤(一)

室生 犀星(一七)

水上淹太郎(一五)

葛西 善蔵(一六)

永井 荷風(一七)

広津 和郎(一八)

宮地 嘉六(一九)

細田 民樹(二四)

上司 小剣(二五)

大正十年二月号(第三卷第二号)大正十年二月一日発行

人間の崇拜(巻頭言)

協同的社会と婦人の解放

慶大教授

高橋誠一郎(二)

資本制度の純経済的純機械的崩壊の経路

山川 均(一九)

共産国家と家庭生活

英国労働運動発達史

議会制度批判

代議制度か委任政治か

議会制度否認の哲学

議会と議会政治

議会政策否認の原理

議会政治の存在理由と崩壊

農民問題研究

社会政策より見たる小作問題

農業の資本主義化と農民運動

失業者帰農問題

小作人の運命的貧窮と其対策

伯林通信 日本倶楽部の一夜

有産者の妻無産者の妻

生の明暗

裝飾玩弄品と家庭奴隸

北国の自然

満韓旅の歌

□万国欄

□世相欄

□間接射撃

□タイムス

□挿画

山川 菊栄(四)

荒畑 寒村(四)

慶大教授

占部百太郎(三)

村松 正俊(三)

尾池 義雄(三)

植田好太郎(六)

長谷川万太郎(九)

早大教授

安部 磯雄(二)

佐野 学(二五)

小野 武夫(二)

横田 英夫(二九)

黒田 礼二(四)

新居 格(四)

堺 利彦(六)

麻生 久(三)

法学博士

牧野 英一(九)

(一〇)

(一〇)

(一〇)

(一〇)

(一〇)

伊藤 弥太 永瀬 義郎  
南枝 知一(カット)

創作

老 若  
ある青年  
家庭  
お猿の番人になるまで

正宗 白鳥 (一)  
小泉 鉄 (一九)  
加藤 一夫 (四四)  
長谷川如是閑 (六二)

大正十年三月号 (第三卷第三号) 大正十年三月一日発行

政党戦と労働果実全収権 (巻頭言)

階級の概念と其近世的体现

法学博士

高島 素之 (二)  
河田 嗣郎 (三)

農産生産の社会思想

堺 利彦 (二七)

唯物論と宗教思想

文学博士

山川 菊栄 (四八)  
藤井健次郎 (五五)  
本位田祥男 (六〇)

紳士閥と婦人解放

好の家庭に於ける地位  
社会改造運動としての消費組合の価値

中間階級の研究

極印付のプロレタリア労働者階級は自ら団結し、資本主義

の桎梏を破壊し自己解放を計る。月給取は中産階級と自称して、準資本家顔で納っていたが、物価の騰貴やら不景気やら鹹首やら、重役の横暴やらで、やっとこのごろプロレタリアの悲哀を痛感して来た。そんなら此の中産知識階級というものの将来は一体どうなるか。

社会の進化と中間階級

中間階級の社会運動

俸給生活から原稿生活へ

教師も労働者である

知識階級と労働運動

社会運動に対する知識階級の使命

早大教授  
法学博士

佐野 学 (八〇)  
島中 雄三 (八六)  
沖野岩三郎 (九六)  
不中弥三郎 (二〇六)  
北沢新次郎 (二二三)  
仁保 亀松 (二六六)

暗影裡の露西亞

科学的事実と怪奇な空想とを結合した驚くべき作品を以て  
西欧の文壇に一新機軸を出したウエルズのソビエト露西  
亜印象記である。自身フュービアンであり、且つ文壇の驍  
将である氏の対露批判は世界的の反響を呼び起した。本篇  
は即ちそれである。

伯林通信「スツルム」運動

独創家の地獄

偶像崇拜の幻滅

偶像崇拜はお芽出度い人間の心理である。一度知識と自覚  
の閃光が投げられて、平民階級は逐次偶像の破壊を試み今  
は唯ブルジョア階級にのみ寂しくもその余影を残している。

偶像破壊の信条

案山子と張子の虎

宗教も英雄も

万国欄

鳥瞰労働運動

漫 画

世相欄

幽霊地面

最後のリイブクネピト

創作

死んで行った友

白 明

恐しい低空 (詩)

黒田 礼二 (二二六)  
中山 啓 (二五二)

新居 格 (二六〇)  
宮崎 竜介 (二六三)  
大庭 柯公 (二七〇)  
(二七六)

(二二三)  
(二二七)  
(二二八)  
(二二九)  
(二七〇)

広津 和郎 (二七一)  
牧野 信一 (二二三)  
福田 正夫 (二三〇)  
(以下次号)